

ご苦労様でした

すみなしものの 心去りゆく

〒31

2008. 6. 29

JR東海労東二運分会

チームリーダー西原所長が「おもしろき こともなき世を おもしろく すみなすものは 心なりけり」（詠み人・高杉晋作＋野村望東尼）という句を残して転勤されるそうです。所内誌6月号を見る限りは、チーム“とうにゆ”のリーダーとしての心残りを感じてしまいます。リーダーとして充実していたのでしょうか。

3年前に、チーム“とうにゆ”のリーダーに就任した時の自己紹介にも高杉晋作を引き合いに出し、「自由奔放ななかにも和を大切に作る、それでいて豪快な生き方には憧れています」と記していました。そして最後は「何年か経って、『必死だった』とか『充実していた』と笑って言いあえるような仕事ができる職場。これが私の理想です」と結んでいました。

確かに「必死だった」ようでした。しかし、今「充実していた」と笑っているのでしょうか。もっとも、3年しか経っていないのだから、そんな時期(とき)ではないかもしれません。職場で試験と競争を強いられて、自己啓発に追い回されている所員の多くの想いは“うんざり”ではないでしょうか。

蛇足ですが

所内誌6月号で、わたしたち東海労がボーナス等のカットを不当と訴えた裁判に触れて「職務規律（ルール）が守られることが、鉄道の安全、安定につながっていることが裁判でも確認された」と言っています。はたしてそうでしょうか。

カット理由には、視差確認の指先と視線の違いや指が曲がっている等の些細なものを含めて1人に対して何十項目もの難癖を付けているのです。これは「規律（ルール）」「安全」を言えばなんでも許されるという傲りでしかありません。まさに、「命令と服従」「規律と忠誠心」そのものと言えます。

西原所長が言う基本動作、指差確認等々の「たくさんのルール」は、私たちの先達が繰り返した痛苦的な失敗を基に考え、確立した知恵です。当然「これで事故や失敗は防げる」という「規律（ルール）」など最初はなかったのです。今、職場では、その先達の知恵を安全よりも、労務管理・社員管理として悪用しているのです。

ともあれ3年間ご苦労様でした。送ることば（句）です
「三年も すみなしものの 心去り（ゆく）」 CD頑爺